

鼓嶽山人の画業

成澤勝嗣

はじめに

鼓嶽山人の伝記資料

鼓嶽山人（生没年不明）は江戸時代黄檗宗の画僧である。伊勢国（三重県）の生まれで、十八世紀の中頃に京都や江戸で活動した。

鼓嶽（または鼓岳）は、絵を描くときに用いる画号であり、僧侶としての名を大海浄涛と称した。これらのことは残された作品から確認できる。十六年ほど以前、この人に関する短い紹介文を草したことがあるが、あまり人目につくこともなかったせい^①か、それ以後、

鼓嶽山人の画業に関する研究が進んだという話を聞かない。画集や展覧会で作品が紹介されることもなく、このままではいよいよ無名の山人として朽ちていくばかりであろう。本稿では、筆者がそれ以降に知り得た作品と伝記資料を紹介し、十六年間の牛歩の跡を纏めておきたいと思うのみである。

前稿でも記したように、戦前の早い時期に鼓嶽山人について言及したのは、早稲田大学とも縁のある三村竹清（清三郎）であった。その『伊勢比事記余録』（昭和四年刊）に「鼓嶽と終南」と題した短編が収録されている。黄檗僧・終南浄寿という人物が鼓嶽山人に贈ったお祝いの詩偈を紹介するものである。

鼓嶽大海和尚、隸籍祖山、作偈賀之、正、

三昧毫端生百花、高提遠入法王家、叢中試鬪芳菲色、贏得袈裟

带絳霞、介石終南拝筆

印

印

鼓嶽画を善くす。鶴亭と格を同うす。崎陽にてや学ばれけむ。

其印も亦佳刻なり。勢陽風雅に其詩を載せて、名浄涛字大海洞津人と見えたり。鼓岳といふ号、山田の鼓か岳より思ひ寄せし

にて、山田の人にはあらずやとも考へらる。(下略)

この記述ぶりから推測すると、鼓嶽山人もまた黄檗僧であり、祖山、すなわち宇治の大本山である黄檗山萬福寺に籍を置くに際して、終南から贈られた書作品が存在していたのではないかと思われる。

この終南浄寿(一七一―六七)はやはり伊勢国の人で、松坂の出身であった。伊勢商人で栄え、文人を輩出した土地柄である。号は介石。父の名は小島息安、兄は江戸で書家として知られた伊藤華岡(名は益道、一七〇九―七六)である。九歳のとき、山城国綴喜郡薪の医王山甘南備寺で出家し、享保十四年(一七二九)、十九歳で同寺の南嶺元勲から嗣法した。江戸へ出て、ついで京都へ移居して、寛保三年(一七四三)洛東神光院に住す。宝暦六年(一七五六)には洛東岡崎の金戒光明寺門前に介石庵を結んだ。宝暦十一年(一七六一)本山萬福寺の塔頭聖林院の住持となる。聖林院復興の喜捨を募るため江戸へ赴いたところで病を發し、彼地で示寂した。自身も詩書篆刻にすぐれた当代の文人僧のひとりである。²⁾

竹清翁の言及する勢陽風雅なる書物は、正式名称を『勢陽風雅初編』という。宝暦八年(一七五八)に刊行された伊勢の文人たちの詩集である。その上巻に鼓嶽山人の詩が二首採録されている。

春日遊東雲寺 僧浄涛 字大海、号鼓岳、洞津人

偶従山上路 蘭若此登臨 城闕開簾近 山河当戸深

珠林懸夕日 香閣敞春陰 囑目経行地 転知不住心

残念ながら、この東雲寺については情報が不足して確定することができない。略歴に記された洞津は、安濃津とも表記され、藤堂藩の城下町であった現・三重県津市の市街部をさしているが、竹清翁は、伊勢神宮にほど近い山田の鼓ヶ岳(現在の伊勢市)のあたりの出身ではなかったかと推測する。

さらに、やはり黄檗の文人僧・悟心元明の『一雨詩偈』の中から、鼓嶽山人に関する新たな情報を見つけることができた。³⁾そこには、

咏画大海姪頭法

翎毛花木自翻々 直以丹青為祖禪

選佛場中経及第 彩毫添色轉嬋娟

咏海全前

澎湃汪洋滄海濱 江河淮濟此中臻

妙高峰頂翻波浪 陸地平沈有幾人

の二首があり、詩偈の配列から宝暦十三年(一七六三)頃の作と考えられる。鼓嶽山人が本山へ登牒して巡察頭法をおこなうに際して贈った祝偈である。

悟心元明(一七一三―八五)もまた、終南浄寿と同じく伊勢国松

坂に外科医・松本駝堂の二男として生まれた。先祖は泉州堺で安南

貿易を営んだ角屋の出であったという。十一歳にして伊勢国多気郡相可村の黄檗宗・天照山法泉寺の衝天元統に投じ、十八歳のとき嗣法。この頃、終南浄寿とともに江戸に滞在して、服部南郭の芙蓉館で学んだ。寛保三年（一七四三）頃には京都比叡山麓に住居し、延享年間（一七四四～四七）には洛東黒谷の金戒光明寺門前に一雨庵を結んだ。終南の介石庵とは隣同士であったという。悟心と終南は父親同士が友人であり、当人たちも終生固い友情で結ばれていた。

宝暦四年（一七五四）には伊勢法泉寺の住持に請われ、以後京都と伊勢を往来する。宝暦十二年十二月には池大雅愛用の白統の印禱に銘を揮毫し（『兼葭堂雜録』）、翌年、近江国神崎郡の鳳翔山正瑞寺の住持となった。こちらは近江商人を輩出した現在の五個荘に位置する。安永二年（一七七三）六十一歳まで正瑞寺の住持を務めたのち、伊勢へ帰郷して乳熊村の浄光庵に隠棲、その地で示寂した⁴。

さて、本山へ登檪して巡察顕法した以上、鼓嶽山人は正式な黄檗僧でなければならない。前稿で「黄檗宗の法系譜には登載されていない」と書いたが、その後、新たな資料を見出した。今一度『黄檗文化人名辞典』所収の「黄檗法系譜」を検索しなおしてみると、大眉性善を祖とする東林下、雷巖広音の五名の法嗣の中に、寛延三年（一七五〇）一月一日に嗣法した「大海徳、濤」という人物がいたのである。実はこれが鼓岳山人のことと考えられる。

黄檗僧の名称のうち、傍点を付した三文字目は世代数によって共通する系字であるため、「黄檗法系譜」の原本たる『宗鑑録』では

省略されている。ただしこれには派系や個人によって多々例外もあり、事情は複雑である。鼓嶽山人の場合は例外的に、東林下で通行の徳ではなく、浄を系字に用いていたものと思われる。ちなみに、伊藤若冲作品にときおり賛詩を書いている黄檗僧・間中浄復（一七三九～一八二九）もまた雷巖門下で、鼓嶽山人にとつては法弟にあたるが、彼もやはり浄字を用いている。

鼓嶽山人が師事した雷巖広音（一六九九～一七六五）は、伊勢国多気郡相可村の天照山法泉寺で衝天元統から嗣法し、のち衝天を継いで法泉寺第三世の住持となった。同じ衝天門下である悟心元明にとつて、雷巖は法兄ということになる。だから、悟心は先ほどの詩偈の中で鼓嶽山人を「大海姪」、つまり法系上の従兄弟と呼んだのである。雷巖は宝暦十二年（一七六二）に京へ上がり、洛北山端の地にある理即院の住持となった。山端（やまはな）は比叡山へ至る雲母坂の登り口付近の地名である。理即院入寺から三年後の明和二年、そこで示寂したものと思われ、悟心の『一雨詩偈』に「輓理即雷兄和尚」の輓偈が見える⁵。なお後述するが、鼓嶽山人はこの本師雷巖と行動をともにしていた可能性がある。

鼓嶽山人の作品

十六年前の前稿発表時において、鼓嶽山人の絵画遺品はわずか三点を知るのみであったが、ようやく十点あまりに増加した。この間、

筆者にその存在をお教え下さった皆様には心より感謝したい。以下にそのうちのいくつかを検討し、鼓嶽山人の足跡をたどってみよう。なお、鼓嶽山人の画の師匠について、江戸の岡田樗軒（一七七九～一八二四）が著した『近世逸人画史』は、

鼓岳山人 伊齋氏、名は浄涛、画を熊斐に学ぶ、墨竹最巧なり、著色花卉翎毛之に次ぐ。

と記す。出典不明だが、熊斐門下とするのは明和六年（一七六九）版『古今諸家人物志』を見誤った可能性がある。同書「唐画・花鳥部」は「熊斐先生東都門生」の項にまず鶴亭をあげ、その隣に「鶴亭門生 釋大海」の名を添える。この「鶴亭門生」という細字の注記を見落としたのではないか。鼓嶽山人の画風は熊斐よりもむしろ、熊斐の門人でやはり黄檗の画僧であった鶴亭（僧名は海眼浄光、一七二二～八五）の方に近く、『古今諸家人物志』の記すとおり、鶴亭から学んだものと見なされる⁶。また「伊齋氏」は伊藤氏の誤記かもしれない。

(a) 「花鳥図押絵貼屏風」 紙本著色 六曲一双 個人蔵 各一三
一・八×五三・七cm（外側二扇） 各一三一・八×五四・〇cm（内側四扇）

〔右隻〕

- (1) 「白梅鸚哥図」 款「穿雲居涛画」 印「鼓岳山人」「浄涛」
「聊日娛己」 図1-1-1
- (2) 「木蓮に燕図」 款「北溟大海」 印「鼓岳山人」「浄涛」「道復泰古」 図1-1-2
- (3) 「柳に錦鶏図」 款「涛頭陀」 印「鼓岳山人」「浄涛」「聊日娛己」 図1-1-3
- (4) 「薔薇叭々鳥図」 款「鼓嶽涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「道復泰古」 図1-1-4
- (5) 「棕欄に鶏図」 款「浄涛寫」 印「鼓岳山人」「浄涛」「聊日娛己」 図1-1-5
- (6) 「牡丹猫図」 款「浄涛字大海」 印「鼓岳山人」「浄涛」「聊日娛己」 図1-1-6
- 〔左隻〕
- (7) 「芭蕉黄鳥図」 款「涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「聊日娛己」 図1-1-7
- (8) 「朝顔狗子図」 款「浄涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「道復泰古」 図1-1-8
- (9) 「蓮に白鷺図」 款「北溟主人涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「聊日娛己」 図1-1-9
- (10) 「菊に兔図」 款「涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「道復泰古」 図1-1-10
- (11) 「竹椿に白鷹図」 款「南勢鼓嶽於四明山下雲母精舍」 印

「鼓岳山人」「浄涛」「聊日娛己」図1—11

(12) 「雪松綬帶鳥図」款「雲母山人涛」印「鼓岳山人」「浄涛」

「道復泰古」図1—12

前稿において一部を紹介した十二図の押絵貼屏風で、本稿では初めて全図を取り上げる。なかでも(11)には「於四明山下雲母精舎」と制作地を添記しており(図2)、鼓嶽山人の動向を知るうえでのデータとなる点が重要である。

四明岳は比叡山の異称でもあったらしく、現在では比叡双峰のうち東を大比叡、西を四明岳と呼ぶ。京都側からは大比叡は見えづらいため、四明岳をもって比叡山の山頂と見なすことがある。その洛北修学院側からの登り道が雲母坂と呼ばれる。前稿ではその坂の下にあった雲母寺が「雲母精舎」ではなかったかと推定した。しかし雲母寺は『山州名跡志』によれば、比叡山延暦寺に属する天台寺院であり、黄檗僧の滞在先として些かそぐわれないのは確かである。むしろ「雲母精舎」を雲母坂にある寺院と解釈し、雷巖広音が住した山端の理即院で描かれたものと考えたほうが適当であろう。款記に見える穿雲居、北溟主人、雲母山人は、意味から推してこの地に滞在中に用いた別号であったのだろう。

墨の用法、岩や樹木の形態は鶴亭からの影響を色濃く示している。とりわけ(7)の岩と黄鳥の取り合わせや(10)のカーブする細身の岩は、鶴亭画を祖本とするものである。ただし、鶴亭ほど運筆に

強靱さはなく、鼓嶽山人の画が余技としての性格の強いものであったことを推測させる。遊印を画面の隅でないところに捺すのも鶴亭からの影響といえる(図3・4)。

ちなみに、所蔵者の談ではこの屏風は松坂から出たものである。また屏風の背面が一部剥がれて裏貼り文書が覗いているのだが、ここに「瑣啓上人堂并御廟四十九院再興化縁簿 相可村 てんけい法泉寺」という墨書が読み取れる。どうやら本図は、雷巖広音、鼓嶽山人、悟心元明らと縁の深い伊勢国多気郡相可村の天照山法泉寺に伝来した可能性が高い。この三者の誰かとともに京都からもたらされたのであろう。法泉寺は近年廃絶しているので、その折に流出したものと思われる。

(b)「虎図」宝暦七年(一七五七) 絹本墨画 一幅 個人蔵 一

〇一・三×三一・一cm 図5・6

款「寶曆丁丑秋菊月寫江城客館 南勢鼓岳山人涛」印「僧浄涛印」「別號鼓岳」「陵清天地式林霜」

菊月は旧曆九月、江城客館とは江戸の旅館で描いたことを意味する。別稿においてすでに紹介したとおり、この時期、鼓嶽山人の画の師である鶴亭もまた江戸に滞在しており、二人が同道していた可能性もある⁽⁷⁾。背景の滝や岩壁の平板さは、いかにも素人の余技を思わせる。

(c) 「松に鳳凰図」 宝暦十年(一七六〇) 絹本着色 一幅 個人蔵・現所在未確認 一一七・八×四〇・〇cm 図7・8

款「寶曆庚辰秋於函関偶舎寫意 南勢鼓嶽涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「馳思乎天雲際」

鼓嶽山人の中でもひととき華麗な色彩の作品。「函関偶舎」は箱根関の旅宿をさす。こうした中華風の言い換えは、漢詩文の作成に際して常套的におこなわれた表現である。その用例を集めた明和四年(一七六七)刊『東藻会彙地名箋』を読むと、箱根を函嶺・函谷・玉筍、箱根関を函関・函嶺関・玉筍関などと呼称することがあった。本図の前後の年紀をもつ(b)と(d)の作品は、江戸で描かれたものであることが款記から判明しているので、江戸滞在中に箱根まで出かけたか、あるいは一度帰郷する途次の作か。前者とすれば、鼓嶽山人の江戸滞在は少なくとも九年間に亘ったことになる。

(d) 「牡丹菊小禽図」 宝暦十二年(一七六二) 紙本淡彩 双幅

個人蔵 各一一六・六×四二・八cm 図9〜11

(右) 款「寶曆壬午重陽日於江左旅館 浄涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「馳思乎天雲際」

(左) 款「南勢鼓岳道者寫」 印「鼓岳山人」「浄涛」「馳思乎天雲際」

二幅並べたときの構図と款記の記載にやや不自然なところが見え、本来は現右幅を中央とする三幅対であった可能性がある。背景を淡い水色でまだら塗りするのは鶴亭と共通する。「重陽」は九月九日であり、右幅に滞在先を「江左旅館」と記す。先述した『東藻会彙地名箋』によれば、服部南郭の諸詩において、江戸のことを江左(隅田川東岸の意か)と呼称する例のあることが記載されている。南郭の詩集を読んでの表現であろうか。また、南郭は宝暦九年(一七五九)まで存命であったから、先に終南浄涛や悟心元明が入門していることを考え合わせれば、実際に面会を果たしたうえで董陶を受けた可能性もあろう。鼓嶽山人の漢詩文に対する傾倒ぶりは『勢陽風雅初編』でも見たとおりである。

(e) 「牡丹に兔図」 明和二年(一七六五) 絹本着色 一幅 個人蔵 一一一・九×三五・五cm 図12〜14

款「明味乙酉春寫於東都客館鼓嶽涛」 印「鼓岳山人」「浄涛」「臘月扇矣」

一見して樹木かと思うような多孔質の細長い太湖石は、やはり鶴亭と共通する形態感覚をもつ。しかし、焦墨を擦りつけるような岩皴は、鶴亭とは異質の個性である。これもまた「東都客館」、すなわち江戸滞在中の作品とわかる。明和二年春、すなわち一〜三月の制作であるが、この年六月一日、本師の雷巖広音は洛北山端の理即

院で示寂した。なお、同年夏作の著色「牡丹図」（個人蔵）の写真が手元にあり、実物は未調査ながら、「明味乙酉夏寫 淨湊叟」の款記が読める。「和」字を「味」と記すのは鼓嶽山人の好癖であったと見える。

(f) 「松に鸚鵡図」 絹本着色 一幅 個人蔵 一二・六×四九・九 cm 図15 17

款「鼓嶽」 印「鼓岳山人」「淨湊」「馳思乎天雲際」

最前景で黒々とした松樹が中央を縦断する。大胆な構図が印象的な作品。白鸚鵡は外国産の輸入鳥であり、同種の鸚鵡を題材とした鼓嶽山人筆「海棠鸚鵡図」がパリのギメ美術館に所蔵されている（収蔵番号MG10603）。こちらも絹本着色で寸法は一二・四・六×三九・五cm。落款は「鼓嶽道人寫」のサインに「鼓岳山人」「淨湊」「臘月扇矣」の印がある。ギメ美術館で実地調査した知人からの情報によると、巻留部に墨書で「海棠鸚鵡鳥画 天保四癸巳仲春 鈴木平五郎殿 十代目戸木三郎兵衛」と記されているとのことである。⁽⁸⁾

(g) 「白梅錦鶏図」 絹本着色 一幅 個人蔵 一四五・七×四三・一 cm 図18・19

款「鼓嶽道人寫」 印「鼓岳山人」「(不明)」「馳思乎天雲際」

ここまで見たとおり、鼓嶽山人の描く植物モチーフは、惣じて、鶴亭よりも煩瑣で過剰な表現に傾斜する。まさに「青葉繁れる」という形容がよく似合う。樹木や葉叢の繁茂ぶりが見せつける旺盛な生命力は、山人のエネルギッシュな性格のなせるところであろうか。以上の作品群に加えて、これも筆者は写真でしか見ていないが、鶴亭の賛をもつ個人蔵の「墨梅図」が存在する（図20）。款記は「鼓嶽道人」で、鶴亭の題には「雀亭道人光」と記される。あるいは前景の白抜き樹幹が鶴亭の筆で、上方に添えられる奔放な梅枝を鼓嶽山人が描き加えたものかとも思われる。弁別は困難であるが、師弟の合作として貴重であろう。

おわりに

鼓嶽山人の画業は、伊勢と黄檗という二つの文化圏に支えられて展開した。伊勢神宮のお膝元という由緒を誇る伊勢は、かたや三井家をはじめとする豪商を輩出した裕福な土地柄でもあった。その経済力が、鼓嶽山人の広範囲に及ぶ活動を支えていたのではないかと推測する。また黄檗宗も江戸時代には権門からの帰依が厚く、中国からの異国文化を色濃く伝える最先端の存在であった。その両者の中で学んだ詩文と絵画の才能によって、鼓嶽山人の文人としての性格が形成されたのである。非常に恵まれた立場にいた人といつてよい。この二つの支柱に沿って調べを進めれば、今後さらに鼓嶽山人

の実像について明らかになることが増えるだろう。それが今後の目標である。

注

- (1) 拙稿「鼓嶽山人のこと―拾遺長崎画人伝」『博物館だより』五四号、一九九六年、神戸市立博物館
- (2) 終南浄寿の履歴については大槻幹郎、加藤正俊、林雪光編著『黄檗文化人名辞典』（一九八八年、思文閣出版）に詳しい。
- (3) 愛知県個人蔵の写本を参照した。閲覧に際しては大槻幹郎先生から御高



図 1-1



図 1-2

作品 (a) 右隻

配を賜った。

- (4) 注2前掲書参照。
- (5) 注2前掲書「補遺」の項参照
- (6) 鶴亭については拙稿「画僧・鶴亭の文事」（佐々木剛三先生古稀記念論文集 日本美術襍稿）一九九八年、明德出版社）および「鶴亭筆 墨梅図」解説（『国華』一四〇五号、二〇一二年）を参照のこと。
- (7) 拙稿「江戸の文人社会と「南蘋派」趣味」『江戸の異国趣味―南蘋風大流行―』展図録、二〇〇一年、千葉市美術館
- (8) 奈良県立美術館の稲畑ルミ子氏より御教示を賜った。



図 1-7

作品 (a) 左隻



図 1-8



图 1-6



图 1-5



图 1-4



图 1-3

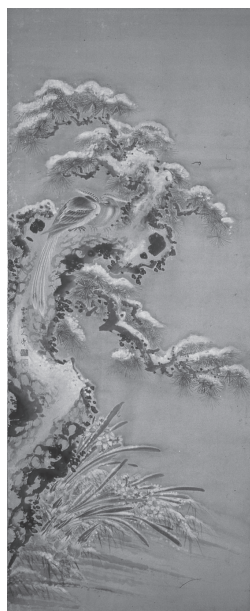


图 1-12



图 1-11



图 1-10



图 1-9

作品 (b)

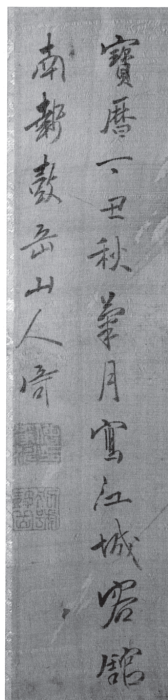


图6



图5

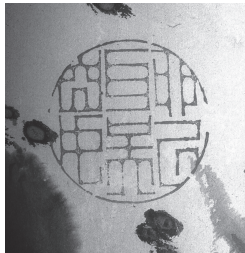


图3

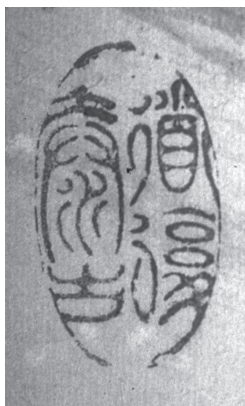


图4

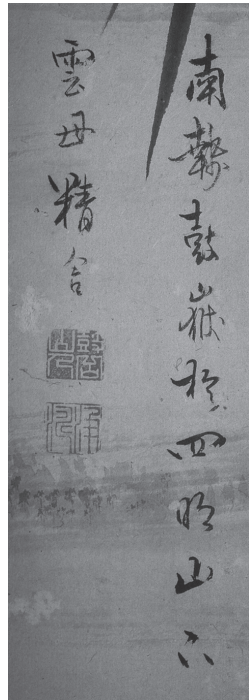


图2

作品 (d)



图9-2



图9-1

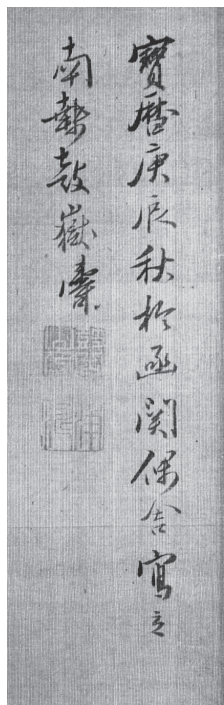


图8



图7

作品 (c)

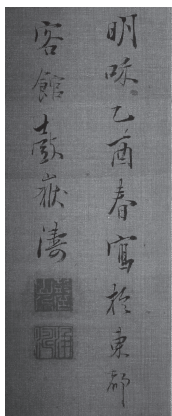


図13

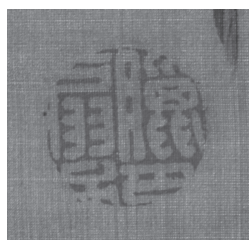


図14



図12

作品(e)

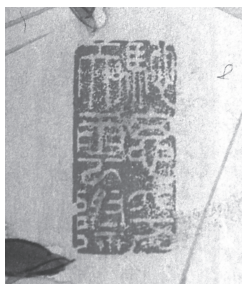


図11

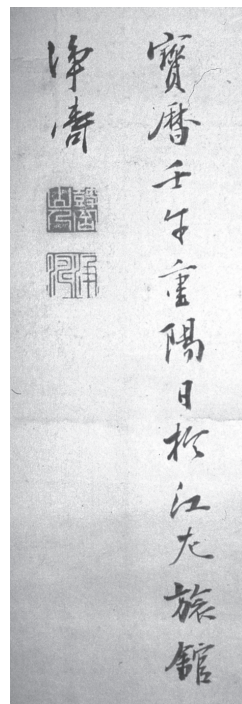


図10



図17

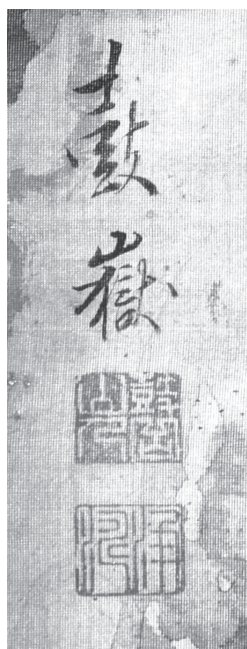


図16



図15

作品(f)



图18

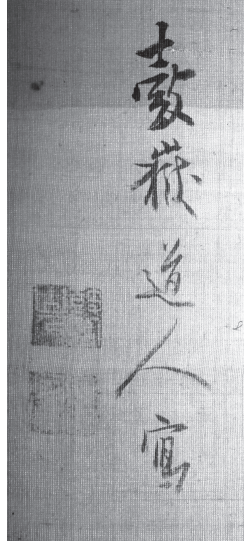


图19

鼓岳山人·鹤亭合作「墨梅图」

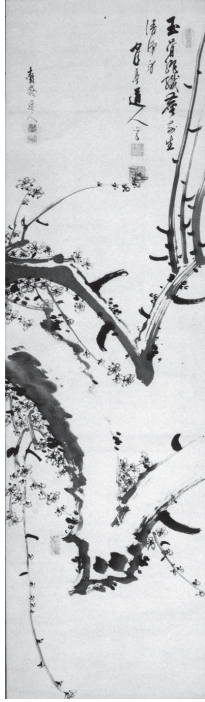


图20